

高津高校卒業の頃（1953年昭和28年3月）

野口幹夫

KOZOOM サロン28のサブテーマで「高津の卒業の頃」としたので、二度とない機会を書き留めてみたい。まとまった記憶は無いので断片の寄せ集めでしかない。

卒業を前にしたころ、懸命にしたことは、高津新聞部の部室に残そうとした「この道を」という指導書の作成であった。3年になると、ちらほらと入部を希望する後輩が訪ずれるようになり、無垢で頼りない彼らに書き残す必要を感じたのだ。

我々5期生は、先輩のいない新制中学育ちで、先輩の存在になじめず、彼らはい

たが敬遠し親しく指導を受けようとは思わず、彼ら抜きで自由に新しい高津新聞を作り上げていったという自負があった。最近読んだ高津60周年記念誌を読むと、それはとんでもないことで、高津全体が長い歴史の中ではぐくまれており、そんな歴史の代表でもある先輩に敬意と指導を仰がなければならなかったのかと思うが、当時の我々の実際はそうであ



った。

生意気にも、当時の信念は、時代の変革の波に高津新聞も加担していくのだといったもので、それまでの高津新聞は生ぬるいものだったと見ていたのだ。その路線を後輩にも引き継いで行かせたいと願い、一生懸命に書き、小冊子にして部室の書棚に鎮座させたことまでは覚えている。

新聞部の部室は中庭から東にぬける道の途中に、独立した外階段があって、2階に上ると独立した部室があった。音楽室講堂に近く、音楽部が練習するのがよく聞こえてきた。何回も練習しておられ自然となじみになったのが、モーツァルトのアイネクライネナハトムジークの第1楽章だ。今もこれを聞くと、反射的にあの時、あの場所を思い出す。

昭和28年3月 自分にとっては大きな出来事の月であった。何より後の人生を決めてくれた阪大工学への合格発表。そして高津卒業式で学業の賞状とともに、新聞部の部活の賞状が頂けたことだった。村尾や安保、石原君たちの同僚を差し置いて自分だけが表彰されるとはどうかと思ったがこれは我々全体が表彰されたのだということと思い戴いた。自分にとっては誇りのメダルになった。

何故かこの季節に思い出すことがある。スターリンが死んだのだ。その前の年に日本で公開されたソ連映画「ベルリン陥落」が、その死を記念して再上映されたのであろう、それを見に行ったのだ。スターリン礼賛の映画だった。左翼学生であったので、ソ連と中国の社会主義革命を憧憬の眼差してみていたのだが、なぜかこの映画のスターリンの描き方を見て、すっかり鼻白んだことだけは印象として覚えている。同じ年にショスタコーヴィチの「森の歌」が大阪の大ホールで演奏されたときは、同じようにスターリン礼賛の内容だが、映像が無いためか純粹音楽として大好きになったのだ。もう演奏の機会もほとんど無い名曲だが、心ときめく曲で聞きたくなる思いは、今も変わらない。なぜかこの卒業の頃の思い出につながっている。

そして ともかくも高津を去るときが来た。

思い返せば、高津に入ったときは、精神も幼かったが、背も小さく、いわばまだ子供だった。この3年で背は伸びたが、何よりも生涯付き合ってくれた友達を得て、彼らから学び取って人生の背も伸びた。卒業後も「野口君ベルグソンを読みたまえ」と教えてくださった加藤先生も高津の先生だった。ようやく大人への1歩を踏み出せた門出がこの卒業だった。